伝統的日本家屋と文化に見られる精神性の高いメタファーとしての柱

ジャック・リーバー

日本の伝統的家屋のもつ要素には精神性の高いメタファーが備わっている。この論文は、様々な日本文化シーンでの神聖なる象徴としての柱、又は特定の柱のもつ歴史的に特別なシンボルとしての意味合い等について、推論を交えて考察するものである。まず、「越えることのできないロートの聖木」に代表されるように日本においても木及び柱が天と地とを繋ぐシンボルと見なされていることについての考察からはじめ、日本の建築物における精神性へと展開する。このことに関連して、日本で建築の着工に先立ち行なわれる地鎮祭、構造部材の組み立ての最後の作業となる棟木を上げる時に行なわれる上棟式という神聖な儀式にも触れている。

日本の伝統文化と道徳（和合を求めて）

角井宏

２１世紀を迎え、世界は平和を求めて真剣に悩んでいます。１次大戦の戦死者は軍人９割、２次大戦では市民が９割という数字から見ても、市民の一人一人が平和の確立を考えなければ、安心できない状態に置かれている今日この頃です。いかにして平和の確立は可能か。

国家間の戦争は通常国と国との利害の対立が原因といわれていますが、現実に起こった戦争は国家間の利害対立の前に国民相互間の民族・宗教・文化的不信に立脚していることが多いことはすでに経験済です。従って宗教の一体性、民族の一体性、世界の一体性を信ずることができれば良いのですが、それには多様な伝統文化に潜む人類の一体性を確認し合うことが大切です。その手がかりとして、ＡＢＳ日本は今年の年次大会で「日本の伝統文化と道徳」を取り上げました。

そのため、日本固有の宗教である神道及びこれと融合する形で発展した日本仏教、武士道、その影響下に発達した、書・音楽・演劇・舞踊・建築等々の各分野のついて、会員及び参加者各位から日ごろの研究成果をご披露頂きました。これらの多彩な伝統文化は、いずれも日本固有のものであって、外国文化とは隔絶した特異なものが少なくありませんが、一歩突っ込んで見ますと、外国文化の強い影響を受けているものや、輸入文化をわが国の伝統に合うように変形改造したりしています。しかし、故意に日本の独自性を主張しているものよりは、日本人の歴史や風土習慣に合うようにしているものが多いので、その由来を解き明かすことで、形の上では正反対でも、人類の一体性を確信できることになると思います。

例えば、伝統演劇の能は、外国演劇のように写実より、抽象化・様式化を尊重します。これはあの世との交信を主題とする夢幻能の場合、ありのままの、感情を露出するより、仕草を様式化することによって、俳優の内奥を観客に憶測させる方が効果的だからだと思います。こういう反対現象は、劇の場合だけでなく、日常生活でも秘するより露わるるはなしといって、感情を意識的に隠すことかありますが、決して無感情ではなくて、悲しみを露わにする人以上に激しく悲しんでいる訳です。　そこを見抜けないと、薄情で共生不可能な人間と見違えてしまうわけです。

日本人の宗教心や社会的習性でも同様のことがあり、随分誤解を招いています。

日本に仏教を積極的に導入した最初の宗教家は、聖徳太子ですが、日本のトップの天皇は、神道の祭主ですから、一神教的な考えでは、仏教を採用できない。そこで太子が教えたのは、神仏一体、王法一如、両者は矛盾しない。神が仏を守り、仏が神の姿であらわれるという思想で、これは後に聖武天皇の奈良大仏は伊勢の天照大神だという信仰になって来ます。この奈良大仏の建造を助けたのが、八幡様ですが、当時八幡神社は九州にしかなかったのが、これを契機に全国津々浦々に八幡宮ができたわけで、この神仏一体は、明治維新まで千年以上続くわけで、維新後神仏分離令が出ましたが、5年も経たないうちにもとの黙阿弥です。日本の人民から見れば、そんな無理して分離する必要はない。一神教でないからといって信仰心が薄いわけでも、無節操なわけでもないのです。日本人は万神霊信仰で、一木一草皆神です。道端の道標も沢山の人を導いてくれ、見る人の心をなごませてくれる存在ですから、粗末には扱えません。万神霊信仰には殆ど教義はありませんから、バハイの教えとも矛盾しません。

日本仏教にも親鸞の一向一揆や日蓮の法華一揆のような一神教的な宗教があって、時の権力者を困らせましたが、神道の元祖である天皇にはたてつきませんでした。天皇不親政の秘密はどうやらこのへんにあるのではないでしょうか。

ところで、平和は以上の文化の多様性を承認し、相手を理解できる和合が前提で、自分が攻撃しないことを誓ったり、相手が攻撃してこないことを祈ったりしているだけではだめで、相手の理解を通じて、積極的に人類の一体性を説得できなければなりません。それを可能にするためには、相手のトラウマを除いたり、信頼を築き上げる対話法の研究も必要です。

武士道(日本の魂)と日本の伝統的道徳教育

尊田望

抄録

新渡戸稲造の『武士道』は、西洋人の妻や同僚がしばしば提示した日本文化に関する質問への返答として1900年に書かれた。この著作で、新渡戸は「サムライ」に施される教育こそが日本の伝統的な道徳教育であると断言している。この本では、日本人の代表的な「美徳」をいくつかあげられ、解説されている。興味深いことに、故大業の翼成者ルヒア・ハヌームは、1970年代に日本を訪問した際に観察した日本人の美徳を多数上げて賞賛している。この研究では、新渡戸が説明している日本人の美徳と道徳教育を、バハイの美徳と道徳教育観と比較対照する。

背景

「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である」

武士道は、何百年という長い日本の歴史の中で、武士の生き方として自発的に醸成され発達を遂げたものである。したがって、明確な時と場所を指して、「ここに武士道の源泉がある」などとは言えない。武士道の起源は封建制の時代の中で自然に自覚された。ヨーロッパで、封建制の始まりとともに職業的騎士階級が必然的に台頭してきたように、日本でも又、鎌倉時代ころに武士階級が生じた。新渡戸稲造の『武士道』は、西洋人の妻や同僚がしばしば提示した疑問への返答として1900年に書かれた。この著作で、新渡戸は「サムライ」に教え込まれる日本の伝統的な道徳教育について雄弁に語っており、日本人の代表的な「美徳」をいくつかあげ、それぞれについて解説している。興味深いことに、バハイ大業の